

院政期における伊勢平氏庶流（補遺）

野口 実

はじめに

本誌前号に「院政期における伊勢平氏庶流―「平家」論の前提作業―」（以下、前稿）を発表した。そこでは系図（中条家文書「桓武平氏諸流系図」・「尊卑分脉」と記録所見との照合を行い、平氏庶流の一般的な官歴のパターンや在地支配と在京活動のあり方などから、かれらがまさに院政期の「京武者」としての役割を担っていたこと、また、平家にたいする従属傾向は大きいものの、直接院や摂関家に奉仕して相対的に自立性を保った存在も多く、これらの存在形態についての考察がさらに要請されることなどを指摘した。

ところで、この前稿もその驥尾に付するものといえるのだが、このところ伊勢平氏・平家の族的結合や軍事貴族・武門としての存在形態に関する研究が活況を呈しはじめている。二〇〇二年以降に発表されたものに限っても、a 高橋昌明「平氏家人と源平合戦―譜代相伝の家人を中心として―」（『軍記と語り物』第三八号、二〇〇二年）、b 栗山圭子「二人の国母」（『文学』第三卷第四号、二〇〇二年）、c 金永「平時子論」（同）、d 大橋直義「中世の系図と歴史／物語」（同）、e 鈴木啓子「平家物語」と「家」のあり方」（同）、f 井原今朝男「中世善光寺平の災害と開発―開発

勢力としての伊勢平氏と越後平氏——〔国立歴史民俗博物館研究報告〕第九六集、二〇〇二年）、g 田中大喜「平頼盛小考」〔学習院史学〕第四一号、二〇〇三年）、h 同「平氏の一門編制と惣官体制」〔日本歴史〕第六六一号、二〇〇三年）、i 川合康「治承・寿永の内乱と伊勢・伊賀平氏——平氏軍制の特徴と鎌倉幕府権力の形成——」〔第二四回平家物語研究会報告、二〇〇三年四月二十日、於、共立女子大学）、j 菱沼一憲「元暦元年伊賀伊勢平氏の乱と平信兼」〔季刊ぐんしよ〕再刊第六〇号、二〇〇三年）などが管見に入ったところである。

当初、本稿においては、前稿の考察を前提として、保元・平治の乱以降の時代を中心にした平家と伊勢平氏庶流との関係の解明を意図していたのであるが、その執筆には、右の成果の吸収・反芻の必要から、しばらくの猶予を得る必要が生じた。一方、前稿では伊勢平氏庶流の検出に記録のみに依拠するところが多く、典籍（編纂史料）とはいえ、記録に近い史料価値を認められている『本朝世紀』・『百鍊抄』の記事を十分に渉猟していないという重大な欠陥があった。また、発表後、米谷豊之祐氏から、V〈け〉盛国（符号は前稿のもの、以下も同じ）・VII〈う〉資盛について人物の比定に誤りのあることや他の史料所見についての詳細な御教示（本稿の当該項目で述べることのほとんどが、これに基づくことを明記しておく）、元木泰雄氏からは、II〈す〉季盛に関する史料について遺漏のある旨の御教示をいただいている。そこで、ここでは前稿の訂正・補足を行い、その上で、右にあげたa―jの業績における伊勢平氏庶流に関連する指摘や米谷氏らの御教示をふまえて伊勢平氏庶流の存在形態について若干の考察を加え、もって研究報告の責をふさぎたいと思う。

一 伊勢平氏庶流に関する史料所見の訂正と補足

（一）訂正

V 〈へ〉 貞光 この項で、『本朝世紀』康和五年（一一〇三）十二月二十九日条に「帶刀左京進成（盛）光男」の平定光が木工允に任じたという佐々木紀一氏の指摘を紹介したが、出典によれば、「」内の「帶刀」と「左京進」以下は別行であり、帶刀は定光の前任官職を示す。

V 〈へ〉 盛国 系図に季衡の子として見える盛国については、すでに角田文衛氏が『平家後抄―落日後の平家―』（朝日新聞社、一九七八年、六二ページ）において、その経歴を丹念にたどっている。ここでも指摘されているように、『吾妻鏡』文治二年（一一八六）年七月二十五日条の盛国の死没記事に付された略伝中の「季衡七男」と「承安二年十月出家」は明らかな誤りである。ただし、「今年七十四」という没年齢は首肯できるもので、とすれば、かれの生年は永久元年（一一三三）となる。文治二年に鎌倉御家人岡崎義実のもとで断食によつてこの世を去った平盛国は、『吾妻鏡』の割注に「伊勢守」とあるのが不審だが、『延慶本平家物語』第一末七「多田藏人行綱仲言ノ事」に見える、「平權守盛遠」（系譜不明）の子で清盛郎等の主馬判官盛国①のことであろう（佐々木紀一「桓武平氏正盛流系図補輯（上）」『国語国文』第六四卷十二号、一九九五年、参照）。

ところで、この時代、ほかに「盛国」を名乗る人物としては、『尊卑分脉』に「従五位上左馬助」「母上野介源頼国女」と見える藤原盛国（国史大系本第二篇五三三ページ、②）と『尊卑分脉』に平盛基（I 〈へ〉）の子として見える盛国③をあげることができる。

②は『殿暦』康和三年八月十八日条に、東三条第で物忌中の右大臣忠実に侍した人々の中に所見する「盛国」に

同定されよう。ここに記された侍の中には、忠実の乳母子源基俊（『尊卑分脉』国史大系本第三篇四四九ページ）、撰関家の家司・職事を勤めた源盛家・盛経兄弟（同四六三・四六四ページ。ちなみに、これらの父盛長も家司）、撰関家の家司で時に五十歳であった大江通国（同第四篇九二ページ。のち大学頭）、このころ忠実の前駈や供人をしばしば勤めていた橘説兼（のち、天永二年（一一二一）～永久二年（一一二四）の間、検非違使尉を勤めていたことが諸書に見えるが、この時期使尉の多くが白河院の私兵と化している中で、説兼は撰関家の私事をしばしば勤仕している）があり、このような撰関家と緊密な関係をもつ者達の中に見出せる盛国も、やはり撰関家に強く従属した存在と見られるからである。すなわち、『尊卑分脉』によれば、その息男に藤原忠通の側近にあつて、平家全盛期には清盛と提携して撰関家の地位保全に奔走し、権大納言の官にまで到達した邦綱の名を見ることができるのである。したがって、前稿でV（け）盛国に比定した『中右記』長承元年（一一三二）五月二十日条の「馬助盛国」と同二年二月九日条の春日祭使供奉人中の「盛国」は、この藤原盛国とすべきであろう。

③の平盛基の息男盛国は、中条家文書『桓武平氏諸流系図』には所見しないが、『尊卑分脉』の傍注に「内蔵允」とあることから、前稿でV（け）（季衡の子）に比定したのは誤りで、これに当てるべきであろう。さらに『中右記』長承四年（一一三五）四月一日条の齋院司除目で伊勢守に補された平盛国も、内蔵允補任が保安二年（一二二二）であつたことから、この人物である可能性がみとめられる。

なお、前稿であげた『中右記』長治元年（一一〇四）三月二十日条の「左衛門尉平盛国」は、同書天仁元年（一一〇八）十月二十日条にも見え、天永二年（一一二一）正月六日条には検非違使盛時が従五位下に叙されたとみられる記述があり、これらは同一人物と考えて良い。この盛国は時間的に見て①と別人であることは明白であるが、むしろ①について『吾妻鏡』が誤った「季衡七男」と考えると整合するのではないだろうか。とすれば、この人物④

こそ本項目の該当者となる。

Ⅶ 〈う〉 資盛 前稿では白河院の近習としてあげた「安芸守資盛」は平氏ではなく、南家藤原氏の人物であった（『尊卑分脉』国史大系本第二篇四五八ページ、「中歴」第七）。したがって、大学允資盛以外の記述は削除する。

(二) 補足

Ⅰ 〈か〉 宗盛 『本朝世紀』康和五年（一一〇三）二月三十日条に、従五位下で検非違使の宗盛が下総守に任じたことが見える。

Ⅰ 〈き〉 盛信 『本朝世紀』久安四年（一一四八）正月二十八日条の除目入眼の記事中に、平盛宣が「暲子内親王去年給剩欠」によって右馬少允に任じられたことが見える。

Ⅰ 〈け〉 盛基 『本朝世紀』康和五年（一一〇三）正月六日条に、検非違使平盛基が従五位下に叙されたこと、同年二月三十日条に相模権介に任じられたことが見える。

Ⅰ 〈こ〉 盛時 『本朝世紀』久安三年（一一四七）七月二十四日条に、院による武士御覧の記事があり、平氏では佐渡守盛兼とともに盛時の名が見える。

Ⅱ 〈き〉 定房 『本朝世紀』仁平三年（一一五三）四月六日条に、賀茂斎王御禊の次第使として「左馬助平朝臣定房」が見える。

Ⅱ 〈す〉 季盛 保延三年（一一三七）十一月、伊勢神宮の正・権禰宜ら数十人の神民が群参上洛して、三十三カ条にわたって平季盛を訴え、その結果、季盛が佐渡に配流されたことが『平安遺文』四七〇八・四七〇九号文書な

どに見えることは、すでに高橋昌明氏の紹介するところである（『清盛以前——伊勢平氏の興隆——』平凡社、一九八四年、五五ページ）。『百鍊抄』同年十一月十五日条には神人が参陣して季盛の罪科を訴えたことよって、佐渡への配流を定申したことが見え、また、『本朝世紀』康治二年（一一四三）閏二月三日条には、去る保延三年十二月十三日に大神宮の訴えによつて配流された「前主殿助平季盛」の召還決定の記事が見える。季盛が在京して京官を帯ずるとともに、本拠たる伊勢の所領の経営を積極的に展開していたことをうかがわせる所見といえよう。

Ⅱ〈せ〉範仲 『本朝世紀』康治元年（一一四二）正月二十三日の除目入眼の記事に、平範仲が大炊助に任じられたことが見える。

Ⅱ〈と〉信泰 『本朝世紀』久安三年（一一四七）十二月二十一日条によると、この日の除目で皇太后宮御給によつて平信康が少監物に任じられている。

Ⅲ〈お〉宗清 『本朝世紀』康和元年（一〇九九）十二月十四日条に、この日の除目で左馬允から左衛門少尉に任じられたことが見える平宗清は、『殿暦』天永二年（一一二二）二月七日条に見える検非違使宗清と同一人物であろう。

Ⅳ〈う〉貞兼 『本朝世紀』康和五年（一一〇三）十二月二十九日条に、「左衛門尉兼季男、院所衆」の平貞兼が帯刀平定光らとともに春宮御所辺で犯人を逮捕した賞により右（左）兵衛尉に任じられたことが見える。

Ⅳ〈え〉盛兼 右のⅠ〈こ〉で見たように、『本朝世紀』久安三年（一一四七）七月二十四日条に所見する。また、同書から久安五年十二月三十日の小除目で和泉守に任じたこと、仁平元年（一一五二）十二月二十九日の小除目で同官に重任したことが知られる。

Ⅳ〈お〉信兼 『本朝世紀』久安三年（一一四七）十二月二十一日条の除目記事の中に、統子内親王の保延四年

の未給による御給で右兵衛権少尉に任じたことが見える。

V 〈い〉 季遠 『本朝世紀』 康和五年（二一〇三）正月六日条の除目入眼の記事によって、かれが武者所から左馬少允に補されたことが知られる。

V 〈こ〉 盛康 『本朝世紀』 康和五年（二一四二）四月十一日条に、「造七宝御塔行事所献者」として刑部丞平盛康が所見する。『中右記』 同八日条を参看するに、この記事は本来、八日条に入るべきもので、かれは成功によって刑部丞の官を得たのである。ついで『本朝世紀』 同十七日条には、かれに御褌の前駆を勤仕させるため、平為宣を解却した替わりに右兵衛尉に補したと見える。異例な形での転任である。

V 〈き〉 光正 『本朝世紀』 康治元年（二一四二）十二月二十一日条に、皇后宮（藤原得子）の御給によって木工助に任じたことが見える。父の定光も木工允に補されたことが明らかであり（『桓武平氏諸流系図』 にも「木工大夫」とある）、木工寮の官を世襲したことが知られる。

VII 〈す〉 正弘 『本朝世紀』 久安三年（二一四七）六月二十八日条に、叡山衆徒らの強訴を防ぐために「散位平正弘」らが法皇（鳥羽）の仰せによって軍兵を発向したことが見える。また、同年七月二十一日条によると、正弘は法皇が武士を「御覧」になった際、甲冑を身にまとった「子姪之輩十三人」を率いてこれに臨んでいる。

VII 〈せ〉 家弘 『百鍊抄』 保延六年（一一四〇）正月九日条に、かれが県召除目以前に左兵衛尉から左衛門尉に抽任されたことが見える。『本朝世紀』 康治元年（二一四二）六月十八日条によると、この日行われた宮城使防鴨河使除目で、檢非違使右衛門尉の「正六位上平朝臣家弘」は、防鴨河使判官に補されている。また、久安三年（二一四七）六月二十八日、叡山衆徒らの強訴にさいし、かれは檢非違使の一員として、父正弘とは別に「切堤辺」に配置されている。『百鍊抄』 久安六年（二一五〇）八月五日条によると、興福寺衆徒らの上洛に備えて、左衛門尉源頼

方（頼賢）が鳥羽院御所、檢非違使源光保が内裏、そして檢非違使家弘が崇徳院の御所の守護に当たったことが見える。

Ⅶ 〈つ〉盛弘 『本朝世紀』 久安四年（一二四八）正月二十八日条に、この日の除目で盛弘が兄の功によって左兵衛尉から右衛門少尉に昇任したことが知られる。

Ⅷ 〈い〉貞清 『本朝世紀』 康治二年（一二四三）九月十七日条に、左兵衛尉平貞清が復任したことが見える。

Ⅸ 〈え〉維綱 天養二年（一二四五）七月九日「鳥羽院序下文」（平安遺文「二五五八号」）に、かれが信濃国小川庄に押妨を加えようとしたことが見え、これは在地勢力間の紛争に乗じたものである点で、同時期の源義朝による下総国相馬御厨・相模国大庭御厨への介入と共通した側面がうかがえる（拙著『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八二年、参照）。

Ⅹ 〈ぎ〉貞仲 『本朝世紀』 康治元年（一二四二）十一月九日条に、大嘗会の国司除目で丹波少掾に任じられた平貞仲が見え、同十四日条によると、大嘗会叙位で従五位下に叙されている。ただし、『桓武平氏諸流系図』の貞仲には「陽明門院侍長」とあり、世代的に見てもこの貞仲と同定できない。

二 正弘一門の評価

冒頭に掲げた近年の平氏関係の諸業績の内、院政期における平氏庶流についてもっとも具体的なアプローチを試みているのは、井原今朝男氏の論文（f）である。この論文の内容は多岐にわたるが、とりわけ注（76）に示された中条家文書『桓武平氏諸流系図』にたいする原本調査の成果、すなわち、一紙から二十四紙にいたる鎌倉時代末

期までの部分が、「書誌学的検討からも鎌倉末期から南北朝期に作成・編集されたものと考えられ、『尊卑分脉』よりも古く」とされた点は、原本未見のまま、史料価値の高さを唱えていた私には大いなる福音であった（拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、参照）。

それはともかく、井原氏は本論文の副題に示されているように、地理学の上で長野盆地と呼ばれる善光寺平のうち、盆地の南西部の川中島平一帯には、中世前期、伊勢神宮領の御厨が多く展開したが、その開発主体が伊勢平氏の平正弘（Ⅶ（上）・Ⅷ（上））の関係者であったことを明らかにされた。とくに正弘の北信濃における伊勢神宮領支配が、平忠盛の家人平維綱（Ⅸ（上））の進出を継承・利用・発展させたものであるという指摘は、保元の乱における忠盛系（平家）と正弘一族の去就の背景を想定させるものがあつて興味深い。

井原氏はまた、信濃における正弘の公領所領化の背景に一門の信濃守就任の事実をあげておられる。現任ないしは旧任受領による支援は河内源氏の坂東進出にも見られるところで（拙稿「豪族的武士団の成立」元木泰雄編『日本の時代史7 院政の成立と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年）、「京武者」の地方進出のパターンを示すものといえる。

貴族社会における平正弘一門の身分的評価について、井原氏はその所領のあり方から諸大夫層とする一方、同様に信濃に所領を有し、保元の乱で崇徳方に立った平忠正（忠貞）を待身分に位置づけている。たしかに、正弘が久安三年（一一四七）七月二十一日の「武士御覧」にさいし、源重成がその郎従に一族の風として「保呂」を纏わせて見る者の眼を驚かせたのに対抗するかのよう（重成のかかる行動の政治的な意味については、伊藤瑠美「院政期における武士の存在形態―清和源氏重宗流を題材に―」『古代文化』掲載予定を参照されたい）、甲冑を着けた十三人もの一族の武士を率いて法皇の関兵に臨んでいることや、久安六年八月五日、家弘が、鳥羽院御所の源頼賢、内裏の源光保とならんで、崇徳院御所の守護を担当している事実、その軍事貴族としてのステイタスの高さを示すものといえよう。

ちなみに、源重成は美濃・尾張などに基盤を有する清和源氏重宗流の在京活動を担う存在であり（伊藤瑠美「院政期における武士の存在形態」）、また源頼賢は源為義の都に置ける政治的後継者の立場にあり（上横手雅敬「院政期の源氏」、御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館、一九八一年）、源光保は鳥羽院北面に祇候した頼光流美濃源氏で、のちに院昇殿をゆるされ、位階は正四位下に到るような高い身分的位置をしめており（元木泰雄「摂津源氏一門」『史林』六七巻六号、一九八四年）、いずれも、平家には及ばないまでも、「京武者」の代表たるにふさわしい存在であった。

三 平盛国の系譜

一（一）に述べたように、系図上のV〈け〉盛国は、清盛の郎等「主馬判官盛国」とは別人であった。とすれば、子息の越中前司盛俊とともに平家政権の中で重要な位置を占め、その邸で清盛が死を迎えるほど親密な関係にあった盛国の系譜は如何。

このことについては、すでに佐々木紀一氏が回答を提出しておられる（桓武平氏正盛流系図補輯（上）『国語国文』第六四巻第一二号、一九九五年）。すなわち、『延慶本平家物語』第一末七「多田藏人行綱仲言ノ事」に「平権守盛遠ガ子主馬判官盛国」と見えることに検討の価値のあることを指摘されたのである。盛遠の名は、最近活字化された妙本寺本「平家系図」（千葉県の歴史 資料編 中世3）千葉真、二〇〇一年、収録）に季衡（V〈あ〉）の子として見えるが、世代的にも不整合な上、その子に盛国は記されておらず、同定できない。佐々木氏も言われるように、この「平権守盛遠」の系譜は未詳なのである。しかし、史料所見を博搜し、その経歴・事績から平家政機構における盛国台頭の背景を探ることは可能であろう。

管見の範囲で平盛遠の所見は以下の通りである。

i 『本朝世紀』康治二年（一二四三）十二月十五日条 除目において「源貞景不仕替」として内舎人に任じられる。

ii 『兵範記』・『山槐記』久寿二年（一二五五）十一月十日条 丹波少掾に任じられる。

iii 『兵範記』・『山槐記』久寿二年十一月二十二日条 従五位下に叙される。

これだけでは、世代的に盛国の父に比定しうる平盛遠なる武士の実在は明らかになっても、それ以上の追及は困難で、しかも、かれは衛府尉のような武士としての要職に就くことがなかったようである。しかし、i の除目のさい、盛遠と並んで内舎人に任じられた平忠遠のその後の官歴は左兵衛尉→左衛門少尉（『本朝世紀』久安四年正月二十八日条）と華々しい。忠遠と同様に内舎人から官歴のスタートを切ったと思われる盛遠も同様のステイタスにあったものと見たい。なお、当時、同系の人の実名の一字には通字が用いられることが一般であることを考えると、「遠」の字を共有するこの両者は近親者である可能性が高い。前稿に掲げた系図において名に遠の字のつくのはV（へい）の季遠とⅧ（へけ）遠衛しか見あたらないが、この時期の記録類からは、佐遠（本院北面・大夫尉、『中右記』大治四年閏七月二十五日条ほか）・遠房（右兵衛尉、『長秋記』保延元年二月二十七日条ほか）・遠忠（木工少允、『中右記』保延三年正月三十日条）・通遠（河内権守、『本朝世紀』久安二年四月十一日条）をはじめとして、平姓の武士で名に「遠」の字のつく者がかなり検出できるのである。

その中でとくに注目されるのは、最初に挙げた佐遠で、白河院の北面として院の側近にあつたらしく、院の臨終の病床にも祇候している（『長秋記』大治四年七月七日条）。かれは『長秋記』保延元年（一二三五）五月十二日条などには検非違使と見え、大夫尉に検非違使宣旨を蒙るという、都の武士として最高の榮譽を担う存在であつたことが

知られるのである。また、その子息の忠遠（明らかに前出の忠遠とは別人）は大治四年（一二二九）九月二十一日、父の犯人追捕の賞を讓られて右（左）兵衛権少尉に任じられている（『中右記』・『長秋記』同目条、『中右記』同年十月九日条）。

主馬判官盛国の父、盛遠の系譜は明らかでないが、佐遠―忠遠のごとく「遠」を通字とする平氏の一流があり、白河院政期における「京武者」の中では相対的にかなり高い地位にあったことは明らかにできたと思う。盛遠―盛国と佐遠―忠遠の系統に繋がりがあれば面白いところであるが、いずれにしても、これらの系譜は鎌倉時代には人々の記憶から忘れ去られてしまったのであろう。

むすびにかえて―展望と課題―

本稿冒頭に挙げた平家に関する最近の研究でとくに注目されるのは、治承・寿永内乱期の平家一門・伊勢平氏諸流が決して一枚岩などではなく（a・e・g）、伊賀・伊勢に勢力を有していた小松殿家人の多くは源義経軍の上洛に協力すらしていること（i）、都落ち後の平家を率いたのは清盛後家たる時にほかならず（c）、そのもとで一門の統制に取り組んだ宗盛については、決して無能・無力の評価は当たらないということ（h）、かれの妹の建礼門院徳子もまた国母として政治的判断の主体であったこと（b）、などを一次史料をもとに具体的に検証した点にある。ちなみに、『平家物語』では平家嫡流のごとく扱われている小松家の面々が寿永二年（一一八三）七月の「都落ち」以後、続々と平家軍から離脱していった事实は、すでに上横手雅敬氏の指摘するところであった（「小松殿の公達について」、安藤精一先生退官記念会編『和歌山地方史の研究』同会、一九八七年）。

上横手氏の所説によつて小松家の公達・郎等の一門離脱の時期を述べると、まず、当時小松家の中心にあった資盛とその腹心貞能は寿永二年十月、平家が九州を追われて屋島に向かった段階、本来の小松家嫡子たる維盛とその弟の忠房は翌元暦元年の一ノ谷合戦の前後のころ、ということになる。高橋昌明氏は資盛における貞能と同様、維盛を後見したのは有力家人たる伊藤忠清であつたと指摘される（^a）。この忠清も都落ちのさい、出家して一門に同道していなかった（拙稿「法住寺殿と小松家の武将たち」本誌第一五号、二〇〇二年）。

ところで、清盛は仁安二年（一一六七）五月、太政大臣を辞任するにさいし、嫡男の重盛にかれが平治の乱以降実質的に有していた諸国の軍事・警察権を継承させている。これをうけて、清盛辞任の直前、重盛には東山・東海・山陽・南海四道の賊徒追討権を付与する宣旨が下されたのである（元木泰雄『平清盛の闘い』角川書店、二〇〇一年、八二―八三ページ）。したがつて、この時点から平家軍制の頂点には重盛が立つていた。しかも、父家貞以来、鎮西における追討行動、すなわち軍事的支配を担当した貞能、重盛死後の段階ではあるが坂東八カ国の侍奉行あるいは特別当に任じたとされる藤原（伊藤）忠清は（飯田久雄『平氏と九州』竹内理三博士還暦記念会編『莊園制と武家社会』吉川弘文館、一九六九年・拙著『坂東武士団の成立と発展』）、ともに重盛の小松家に祇候し、それぞれ重盛の子の維盛・資盛の乳母夫という親密な関係にあつた（a・佐々木紀一「小松殿の公達の最期」『国語国文』七七卷一号、一九九八年）。したがつて、下野の藤姓足利氏（俊綱）・伊豆の工藤氏（祐経）や豊後の緒方氏（維能）などのように東国・鎮西の在地武士には重盛の家人となる者も多かつたのである（西村隆『平氏家人表―平氏家人研究への基礎作業―』『日本史論壇』第二〇輯、一九八三年、参照）。重盛の死後、平家の軍事権力は再び清盛の手に戻された。しかし、養和元年（一一八二）閏二月に清盛が死ぬと、地方における旧重盛家人の平家からの離反状況は決定的なものとなつたように思われる。一門とともに九州に落ちた小松家の嫡子資盛とその乳母父で平家軍制において鎮西を担当した貞能が、重盛の家人で

(治承3年11月以降)

国名

氏

は国衙関係者



あったにもかかわらず、後白河院の意をていした知行国主藤原頼輔の工作によって平家に敵対した緒方維能との折衝に失敗し、それを契機に一門から離脱するに至ったことは、平家一門における小松家と後白河院との独自の関係という背景も含めて、このあたりの事情を象徴していよう（上横手雅敬「小松殿の公達について」参照）。

ちなみに、紀伊湯浅氏も小松家の家人であり、『百二十句本平家物語』によれば、宗重は「侍の別当」をつとめており、また『高山寺明恵上人行状』によれば、かれの四女の夫の平重国は重盛の家人で、治承四年（一一八〇）上総国で討死をとげたという（西村隆「平氏家人表」参照）。かつて私は、この重国を上総介藤原（伊藤）忠清の目代と推定したが（拙著『中世東国武士団の研究』）、忠清が維盛乳母夫であるとすれば、むしろ上総は維盛の知行国で、重国はその目代と考えるべきであろう。なお、三でその系譜について検討した盛国は、鹿ヶ谷事件の時に、清盛が後白河院攻撃を行おうとしたのにたいして重盛が自分の家人を招集したさい、侍の着到をつけたことが『延慶本平家物語』第一末十九「重盛軍兵被集事付周幽王事」に見え、平家が重盛を頂点とした家人の統制機構を築き上げていたことがうかがえるのである（西村隆「平氏家人表」一八四ページ参照）。

軍事権門としての平家を考える場合、そもそも自立的で都落ちにも加わらなかった池家や、この小松家にたいする、文学作品としての『平家物語』から離れた形での検討が求められる。その意味で、高橋昌明氏の a 論文は、歴史学の立場から、池家・小松家のみならず、平家一門各家と有力家人との結びつきや、その合戦時における対応状況について検討を試みた画期的な労作であった。また、元暦元年（一一八四）の伊勢・伊賀平氏の蜂起が小松家の家人を中心にしたもので、かれらが義経軍の上洛にさいして、それを援助する行動をとっていたことを明らかにした川合康氏の研究は、『平家物語史観』の克服において決定的な意味をもつものといえる（川合氏のこの研究成果はすでにいくつかの研究会で報告されているが、二〇〇四年に校倉書房から刊行される氏の論文集『鎌倉幕府成立史の研究』（仮題）に

新稿として収録される予定である。これらのすぐれた業績ををふまえて、東国・鎮西などの遠隔地における平家家人について、在地社会の状況を把握したうえで、同様の追究を加えることを今後の課題としたい。

また、伊勢平氏庶流については、たとえば、平家とは別系ながら鎌倉初期に公卿に列するに到る系統の存在など興味深い問題も多く残されている。さらに、最近、先にあげた「妙本寺本平家系図」をはじめ、東大史料編纂所所蔵『古系図集』所収「平氏系図」など、史料価値の高い平氏関係系図が新たに紹介されつつあるが（佐々木紀一「桓武平氏正盛流系図補輯之落穂」『米沢国語国文』第二五号、一九九六年・山口隼正「入来院家所蔵平氏系図について（上）・（下）」長崎大学教育学部『社会科学論集』第六〇・六一号、二〇〇二年）、こうした史料の博搜につとめ、系譜関係、存在形態に関する事実の解明をはかっていきたいと思う。

なお、末筆ながら、前稿における誤りや遺漏について御教示を下さった米谷豊之祐氏・元木泰雄氏、また、成稿の過程で最近の研究成果の整理について御指摘をいただいた川合康氏・伊藤瑠美氏に記して謝意を表する次第である。

〈キーワード〉

伊勢平氏 院政 京武者